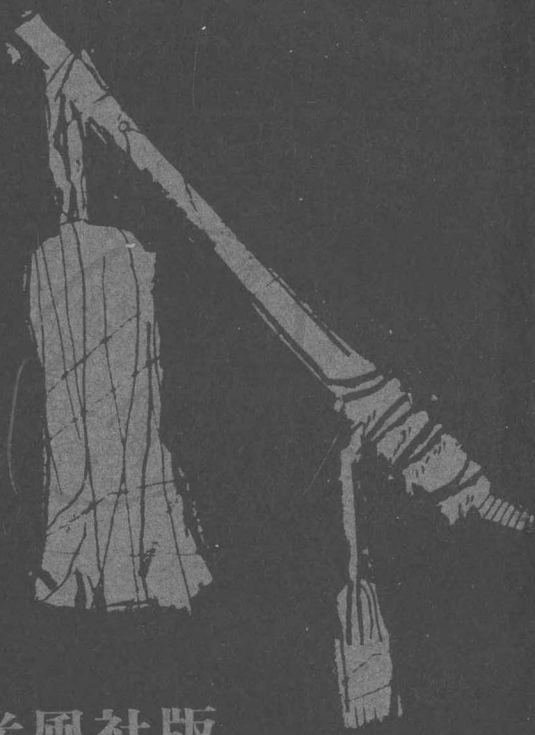
河八郎

柴田錬三郎



光風社版

昭和三十八年十一月二十日　印刷
昭和三十八年十一月三十日　発行

定価　三八〇円

著者　柴田錬三郎
発行者　豊島清史
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社　光風社
東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(291)〇二三八番

落丁乱丁は御取替いたします

目次

非運の巻

尾行　七
道場の人　二〇
その父　三〇
旧家の血　三七
無宿者　四四
草鞋道　五〇
洋妾　五七
影ひとつ　六一
暮れる年　六四

血燃ゆ　六九
犬　七七
無礼打ち　八〇
逃亡　八九
野宿　九七
柱を斬る　一〇四

流転の巻

吟味　一一三
牢獄　一一三
訴状　一二四
遊星　一二三
捕われ奴　一二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

薩摩屋敷　一五七
舟唄　一六七
女囚　一七三
詩一篇　一七七
海　一八五
秋の陽　一九〇

回天の巻

郷愁　一九四
無頼の果て　二〇五
西国行　二一四
やくざ最期　二二五
離反　二二九

闇の底　二三四
蹉跌　二四〇
寺田屋兇変　二五四
孤愁　二六二
仏間の翁　二七一

浪士組の巻

急務三策　二七八
去る者　二八五
新選組由来　二八九
死出の歌　二九八

装幀　三井永一

清

河

八

郎

非運の巻

尾　行

万延元年初秋――。

ここ、三田薩摩屋敷の広庭に面した座敷では、七八人のいずれも壮年前の武士たちが、思い思いの姿勢でずうつと先刻からたむろしていた。

松葉模様をうすく散らした襖を三方たてきつた部屋は、石刷を貼り金泥を散らした二双屏風が奥に据えられたきりの三十畳であつた。

庭園には、苔と石との大きな築山に、女夫松が、悠然と這つていた。かなたの紅楓も芭蕉も、そよともしない澄んだ秋空を、ひくく、ゆるやかに舞う鳶の影が、山茶花のちらばつた砂利の上を、すうつすうつとかすめ去るのどかな午後――。

人々は、午前中からの激しい議論に倦み――、空虚な沈黙が部屋を占めたひとときであつた。
伊牟田尙平は、縁側の柱によりかかり、硯をもち出して、扇子をひろげ、なにか一句ものしようと、しきりに先ほどから頭をひねつていたのだが、ついにあきらめて、ほうり出してしまつた。
しばらく放心したまなざしを庭へなげていると、そばに仰向けに寝ころんでいた樋渡八兵衛が、むつくり起き上り、毛むくじやらの腕をのばして、扇子をひろいあげた。

玉露凋傷す楓樹の林
巫山巫峽の気

と、書いてみせると、どうだとばかり、にやにやした。
すると伊牟田も微笑して、扇子を裏がえすと、すらすらとしたためた。

宿志なお就き難く
徒らに吾をして断腸せしむ
まさにその進取に及んで
何ぞ譲らん古の狂慷慨

ふうむ、と首をかしげていた樋渡は、伊牟田を不審そうに見やつた。
「お主の作か……」
伊牟田は、なお微笑をふくんでこたえなかつた。
「どうも信用ならん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ははは、清河八郎偶成、七陽にあるのだ――」
「そうだろう、撃剣の稽古よりほか、お主の机にむかつとる姿は、まだ見たことがなかもんな」
二人が声を合せて笑つた時、部屋のうちから声がかけられた。有村武治である。
「伊牟田、近ごろしげしげと清河八郎の文武指南所へかようそうだが、それ程の人物かのう――」
その口調には、いくぶんか皮肉な響きがふくまれていた。
青年たちの間で、有馬新七、柴山良助、伊牟田尙平、樋渡八兵衛、橋口壮助、弟子丸竜助らの急進派と、奈良原喜八郎、海江田（有村）武治、大山格之助、山口金之進、鈴木昌之助、道島五兵衛らとは、さながら薩藩の輿論二派を代表する如く、ささいな事にいたるまで、絶えず衝突していた。
その間に立つて、大久保市蔵らは、両派を鎮めるむだな苦労を、幾たびかさねたか知れなかつたが、この対立が、あの寺田屋の異変となつてあらわれようとは、だれがよく想像し得たであろう。
「おはん、一度会うてみるがよい」
伊牟田は、急に憮然となつた。
「清河ちゆうて、異国船にそなえて台場をつくつたおり、その費用で、品川駅を御殿山のうしろ手に移し、高輪もとり払い、大森から佃島あたりに大筒を備えて、合戦すれば、必勝だ、などと申した男だろう？」
「みずから文武指南の看板をかかげた男だからのう」
「荘内の山猿というではないか」

大山や山口は、あきらかに伊牟田を揶揄する下ごころであつた。

伊牟田は、きつとなつた。

「大山！　では、聞こう。百万両もかけて築いた三カ所の台場が、いつたいなんの役に立つたか？いたずらに夷人の嘲罵を買つたのみではないか。それのみならず、幕府は、いや真田も小笠原も明石も、一台の大筒の火ぶたを切る度胸もなく、蠢々として、夷人どもの勝手気儘な横暴を見のがしてしまつた。彼らは、いまだ晨夕太平の迷夢が醒めず、ただ姑息因循な手段にうつたえて、その場のがればかり思いついている。……アメリカからペリーの軍艦がやつてきて以来の幕府の腰ぬけぶりはどうだ。無能無策、ただ周章狼狽、早馬ばかり走らせおつて、浦賀品川の竹矢来は、町人どもの失笑を買つたのみではないか。また大名も旗本も、正月の具足開きと土用の虫干にしか用のなかつた甲冑をひつぱり出して大騒ぎをしおつたあのみじめさ――。敵をむかえる心構えなど、微塵毛頭見られなかつたではないか。そして、こんどのハリスとの下田条約だ。本邦開闢以来、かくのごとき国辱を蒙つた秋がまたとあるか。……内心夷人どもを最も忌憚嫌悪しているのも幕府なら、最も臆病風に吹かれて、ぺこぺこしているのも幕府ではないか。この幕府を拱手傍観して、なんら憤激もおぼえない武士が、大半であるうちに、堂々一戦をまじえよと論ずる清河八郎こそ賞讃されこそすれ、嘲られる理由がどこにあるか、おいどんには解せん。……清河八郎の文は腐儒の学ではないぞ。天下を経綸するために学んだ実践躬行の経学兵論だ。にわかにかびくさい櫃をひらいて縅糸の切れたのをつくろつたり、陣羽織のしみにくわれたのを修理するような手輩とくらべてみるがい

い。……その人の真の学力技倆を知らずして、ただの風聞でそしるなんぞ、唾棄すべきだ。……大山、お主、一度清河道場へ行つて一剣をまじえてくるがいい。はつきりと、その非凡さが知れるだろう。北辰一刀流は、伊達に免許は出しておらんぞ」

伊牟田は、両眼を血走らせて、大山を睨めつけていた。短気と逆上癖で有名な男であつた。

大山は、内心、

——しまつた、よけいなことをいうのではなかつた。

と、はげしく後悔していた。

「まア、伊牟田、そう激するな。なにも清河八郎をののしつたわけではない」

奈良原がなだめようとすると、かえつて伊牟田は、鋭く睨みかえした。

「おいどんは、いわれもなく腹を立てとるわけではない」

「いや、ただ異国船と一戦するなんぞ、結果の不利を知りつつやるのは、あまりに思慮が浅すぎるといつたまでだ。貴公も異国船を見学に行つたではないか、あの威力の前には、大和魂だけでは、どうにもならぬ。矛鋒であらそうのを、はやるだけが兵法ではない。……もしかりに、幕府が、ハリスの軍艦を襲つてみるがよい。……アメリカは、ただちに、ロシヤ、エギリス、フランスの軍艦に呼びかけて、一団となつて反撃して来るに相違ないではないか」

有村が、穏かではあるが、圧迫するような調子で口をそえると、伊牟田は、ふふん、と鼻先で笑つた。

「貴公、前年の清朝と明の戦いを知つとるか？　エギリスが清朝を援けて乍滿というところで、軍艦五十艘をさし向けたに、明兵のために、さんざん破られたではないか。わずか三四艘になつて逃げ散つた不甲斐なさ腰抜けぶりはどうだ！　戦いもしないで、敗北ときめてかかるとは何事か！小便芸者にうつつをぬかした旗本の小伜どもならいざ知らず、わが薩摩隼人にして、この卑劣なる言を吐く輩がおろうとは気づかなかつた」

いつか、一座の空気は、険悪になつて来た。そのままの姿勢こそ変らなかつたが、伊牟田にさし向けられた人々の視線は、息苦しく緊張して来た。

この部屋の緊迫した空気は、すなわちこの時代をもつともよく象徴していた。

嘉永六年、黒船渡来以来、封建日本の様相は一変していた。

徳川幕府の基礎が、これによつてゆらいだのである。

――関ケ原の役以来の屈辱を雪ぐの時到れり。

と、薩長その他の外様大名は、虎視眈々と窺いはじめた。

――功名手に唾して得べし。

と、浪士輩は起つた。

――皇家の凌夷を慨す。

と、策謀する志士も続々とあらわれた。

それぞれ、その出発点を異にしたが、勤王攘夷のかけ声だけはこだまのように呼び応えたのであ

る。

そして、安政の大獄から、この年三月の桜田門の変まで——、一事変の起る毎に、幕府の威権は下落していた。井伊掃部頭の開国方策は、攘夷論者たちをして、外国に降伏したものと看なされたのである。

血気を抱く青年たちが、いずれの党同派閥に加わるべきか、と迷い、あせり、しだいに狂的になるのは当然であつた。

議論が、瞬時の殺気によつて、暴力と化す風潮は、それが革命の方途としてさけがたいことであると、識者さえ認めるようになつていた。

今の場合も——。

もし、だれかが、きつかけをつくれば、数本の刀は、躊躇なく抜きはなたれたであろう。

このおり、この殺気をはらんだ静寂をやぶるように、のどかな唄ごえがした。

濡れて色よし、雨の藤
その仇咲きも君ゆえに
すがたつくろう水鏡
ゆかりの色もなかなかに
うれしい仲じゃないかいな

次第に近づいて来、さらりと襖が開いた。

「殺を以て殺を止む、是天下の仁か――」
益満新八郎が、ふところ手で入つて来た。
「どうだ、山岡に会つたか？」
益満があぐらをかくと、有馬新七が、沈黙を破つて、のり出すようにしてたずねた。
「会つた。幕臣に小栗上野、勝安房、山岡鉄太郎ありだ。旗本七千人、たばになつてはかなわんのう」
「なにを云つた？」
「斉彬公を褒めて、西郷を偉傑となし、長州の人物多きを羨望し、徳川はもう駄目だ、と歎息しおつた。しかし、井伊を斬り小栗をねらうことのみに血眼になるような輩が跋扈しておるようでは、まだ徳川は倒れんと云つたぞ。耳がいたかろう」
「なにを云うか。異国に頼らんとするのは、幕府の財政維持の苦肉の計ではないか」
有馬が、つつかかつた。
「さよう、だが、毛唐が臭気を発するから、目の玉が青いから、むな糞がわるいので、醜夷攘斥といきり立つ烏合の衆は、かえつて回天大業の邪魔にこそなれ、一臂の力さえ仮すを得ぬと――、山岡は、むしろわれわれの味方としてそう云つたのだ。幕府は、ただ異国をおそれて、あるいは借款を得んがために、阿諛しているわけではない。汲々たるみずからの財政にのみ苦慮して、異国を相手にしているわけではない。外国との交易はもはやさけがたいのだ。使節を海外に送り、その文明を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.